

マルクス・アウレーリウス著「自省録」を読む

- 日々の行動の点検を考える -

1. 祖父ウェールスからは、清廉と温和(を教えられた)。
2. 父に関して伝え聞いたところと私の記憶からは、つつましさと雄々しさ。
3. 母からは、神を畏れること、および惜しみなく与えること。悪事をせぬのみか、これを心に思うさえ控えること。また、金持ちの暮らしとは遠くはなれた簡素な生活をする事。
5. 家庭教師からは、労苦に耐え、寡欲であること。自分のことをやって、余計なおせっかいをせぬこと。中傷に耳をかさぬこと。
6. ディオグネートゥスからは、つまらぬことに力をそそがぬこと。
7. ルスティクスからは、自分の性質を匡正し訓練する必要があるのを自覚したこと。
8. アポローニウスからは、独立心を持つことと絶対に僥倖(ぎょうこう)をたのまぬこと。
ひとに説明するとき短気を起こさぬこと。
9. セクストゥスからは、親切であること。
 - ・ 自然に従って生きる。
てらいのない威厳。
友人たちにたいするこまやかな思いやり。
無知な者および道理をわきまぬ者にたいする忍耐。
 - ・ あらゆる人を適当に遇する道。
人生に必要な信条(ドグマ)を見出し、これを適当に分類するのに優れた理解力と方法を示すこと。
 - ・ 恐れやその他の激情の徴候をゆめにも色にあらわさず、このうえもなくものに動ぜぬ人間であると同時に、このうえもなく愛情にみちた人間であること。
仰々しくなく賞讃すること。
多くの知識を持ちながら、それをひけらかさぬこと。
10. 文法学者アレクサンドロスからは、口やかましくせぬこと。
粗野な言葉づかいや、文法的にまちがったことや、気にさわるような表現を用いる人にたいしては、とがめだてするような風に非難せず....。
11. フロントーからは暴君の嫉妬と巧智と虚偽とはどんなものかを観察したこと。
12. アレクサンドロスからは、「私は暇がない」ということを、しげしげと、必要もないのに人にいったり、手紙に書いたりせぬこと。
13. カトゥルスからは、友人が抗議を申し込んできたならば、たとえそれがいわれなき抗議であろうともこれを軽視せずに、彼を平生の友好関係にひきもどすべく試みる事。
自分の先生たちに関して心から善いことをいうこと。
自分の子どもたちにたいして真の愛情を持つこと。

P. 7 ~ P.10

マルクス・アウレーリウス著、神谷美恵子訳「自省録」岩波文庫 1956 年 10 月 25 日刊

- 2006 年 9 月 17 日記 -